

氏 名：太田 祐子
学 位 の 種 類：博士（看護学）
学 位 記 番 号：甲 第57号
学位授与年月日：平成26年 3月14日
学位授与の要件：学位規則第4条第1項該当
論 文 題 目：ジェネラリストとして在る、キャリア中期看護師の物語としての
キャリア
Narratives of Nurses in Mid-Career : Working as Generalists
論文審査委員：主査 筒 井 真優美
副査 高 田 早 苗（正研究指導教員）
副査 佐々木 幾 美（副研究指導教員）
副査 グレッグ 美 鈴（神戸市看護大学 教授）
副査 武 井 麻 子

論文内容の要旨

【研究の背景】

キャリア中期の看護師は、量的（マンパワー）質的いずれの面でも看護実践現場において重要な役割を果たすことが期待される。その反面、看護管理者やスペシャリストに就いていないジェネラリストのキャリア中期看護師は、看護実践能力のプラトーを迎える、職業性ストレスが他の年代よりも高い、今後のキャリアプランが描けない、などの課題や問題を抱えていることが明らかになっている。キャリアという語はこれまで職業経歴や昇進、資格取得といった意味合いで用いられることが多かったが、近年では職業のみならず人生の生き方として統合的に捉えられるようになってきている。看護職者を対象とするキャリア研究は集団の傾向をみる量的なアプローチや先駆的な活動に取り組んだ保健師やリタイアした管理職を対象とするものなどに限られ、キャリア中期のジェネラリストに焦点を置いた研究は見出されない。さまざまな経験を重ねる一方で正当な評価を得にくい当該看護師のキャリアを明らかにすることは、当事者の意味づけや今後の展望を見出す機会になるとともに、キャリア支援のあり方やその促進にとって重要な知見になる。

【研究目的】

ジェネラリストとして在るキャリア中期の看護師のキャリアを、物語として記述する。

【研究方法】

ライフストーリー研究。以下の条件を満たす5名の参加を得た。①35-49歳かつ6年以上の経験、②病院病棟勤務の女性正職員、③管理職・専門看護師等の資格をもたない。データ収集は、語り手と聴き手の相互行為による対話により物語の生成にかかわるナラティブ・モデルに基づく複数回のインタビュー。逐語録を、転機に関連するエピソード、繰り返される話題等を手がかりとして、時間軸を意識し、参加者との間で確認・更新しながらひとりひとりのライフストーリーを描出した。

【倫理的配慮】

日本赤十字看護大学研究倫理委員会の倫理審査を受け承認を得て実施した。文書を用いて目的・方法を説明し、自由意思による参加同意を書面で得た。匿名性を確保し、データの取り扱いを厳重に行った。参加者を共同して物語を構築するパートナーとして尊重し、対等な関係、誠実な対応を心がけた。

【結果】

1) 参加者は 30 代後半 3 名、40 歳代 2 名の 5 名。経験年数は 6 年～20 数年であり、1, 2 施設の 2 ～4 病棟に勤務してきた。全員が看護専門学校卒であり、准看護師を経た者は 2 名、基礎教育前の社会人経験者は 2 名であった。既婚者 1 名、シングルマザー 1 名、未婚者 3 名。

2) 語られたライフストーリー

澤さん「関わる中で、語る中で、見えてきたキャリア」

高齢者へのかかわりに魅力を感じ看護職に。6 年の ICU 経験で幅の狭さとマンネリに限界を感じ、外科病棟へ異動し、患者からのダイレクトな反応や医師の承認に手ごたえを感じた。「日常生活援助」を求め当初からの希望であった神経内科病棟へ異動するが、異なる看護状況に戸惑う。わずか半年で ICU に請われて戻る。外科経験で患者の前後の経過が見通せるようになり、よい看護につながっている実感を得る。スタッフの「底上げ」や人間関係の円滑化に、師長・主任と共に取り組み、意味も見出している。しかし、看護部面接では主任か認定看護師かの二者択一の圧力が年々強くなり、肩身が狭い思いをしてきた。インタビューで語る中で、自分なりの関わりを大切にする主任像が見えてきた。

瞳さん「霧、だんだんと晴れ間—自分を取り戻しつつある日々」

祖父の勧めにより高校衛生看護科、2 年課程の後看護師に。初期には多くの先輩モデルに恵まれ励む。10 年目、病棟再編の中後輩を守るつもりでの行為が理解されず四面楚歌に。元上司の誘いで異動する。「なあなあ」の雰囲気の中でも自分なりに若いスタッフの見本になるようにとの努力をするものの、受け入れられず、患者の「事故死」と上司の態度に心が「折れ」て、元の職場に。患者とのやり取りに笑いがある職場の中で、自分を取り戻し、今後のことに目が向けられるようになった。

香里さん「自分を合わせて生き延び、人として看護師としての価値の融合に向かう」

文系大学卒業後紆余曲折を経て 30 歳前に看護学校に。経済的にも気持ち的にも余裕のない学校時代、新人時代であった。当初から人としての考え方と看護師としての考え方のズレを自覚していた。周囲からの冷遇を感じながらも、病棟文化に自分を合わせ失敗を乗り越え生き延びてきた。そんななかで、副師長の患者への踏み込んだ関わりや、終末期患者の意向に沿う主任の判断に触れ、自分を振り返り目指す方向を見出しつつある。人として、看護師としての価値の融合に向かう新たな一歩を踏み出した。

泉さん「一筋の光明を追い求め、生き残るために模索する」

進学に踏み切れなかった長い准看護師時代、30 歳を過ぎて宗教家になるべく修学したことをきっかけに、通信制で看護師免許を得る。専門病院でのさまざまながん患者との経験のなかで、思春期看護を志して別の病院に移る。小児科に配属されたものの思春期看護は経験できないまま、病院の再編により不本意な再異動を受け入れてしまう。疲労と挫折感でモチベーションが下がり、目標を見失いそうになる中、何とか生き残るための模索の日々を送っている。

咲子さん「広がる可能性へのチャレンジ」

20歳代で離婚し、娘を育てながら准看護師に。勤務しながら看護師免許を取得。子育てもあり、仕事にも一線を引かざるを得ず、割り切るように努めてきた。そんな中でも患者に成長させてもらった、と思えることは多くあった。教育委員を機に敬遠していた看護倫理にも関心が出てきた、がん患者のスピリチュアルケアも避けずに向き合う準備ができてきた。リーダー業務が多く患者に直接かかわる機会が限られてきたのが残念に思う反面、若い看護師への刺激を考える余裕も出てきた。子育てが一段落し、新たな仕事や生活の場に夢を描く日々である。

【考察】

5名の参加者の語りから、必ずしも順調とばかりは言えないキャリアの様相が浮かび上がってきた。初期には先輩に恵まれたり、職場における役割期待に応えようとする「中心化」(Schein, 1978) がうまくいっていた人も、キャリア中期になると望まない職場への異動を命じられたり、職場内での役割期待と応えようとする役割遂行の仕方のずれが大きくなりストレスが高まったりすることが多くなっている。参加者は生じてきた認知的不協和に異動の利点を見出すこと等により適応の努力はするが、なかにはそれもうまくいかない者もいた。さらに、経験を重ねる中で自律的判断ができるようになるキャリア中期看護師は、医師の治療方針や部署の看護業務の遂行の仕方に疑問を抱いたり、独自の提案をしたりする。これが部署の上司らに受け入れられないことにより、中心化をやめる、脱「中心化」とでもいうキャリアのあり様が伺われた。

参加者の多くは、キャリア中期を迎え、体力の低下や新しい環境への適応の難しさを感じ、夜勤をいつまで続けられるか、といった不安を口に出している。その一方で、看護部や上司から主任と認定看護師の二者択一を問われると、ためらいや自信のなさを口にし、さらに責められているような感じさえもっていた。つまり、キャリア支援としてなされているはずの面接がむしろ看護師たちには反対に受けとられているようであった。現在までの努力や積み重ねへの言及や評価がなく、年数だけが強調されたり、ジェネラリストとして在り続けることが含まれないといった要因が関係していると考えられた。

本研究での語りは、キャリア中期にある参加者のキャリアの方向を見失いかける、時には自分自身をも見失いそうになっている厳しい状況を明らかにした。しかし、語ることは、同時に貴重なエピソードを思い起こしその意味付けを深める、揺れ動く自分に向き合う機会ともなっていた。参加者の中には自分が大切にしてきたことを再発見したり、自分を認めこれからのキャリアの方向を見出すことにつながった者もあり、キャリア支援としての可能性の一端を示した。

論文審査の結果の要旨

本研究は、看護管理上の課題であるとの認識はされても、研究対象者として取り上げられることは少なかったキャリア中期看護師に焦点をあて、ライフストーリーアプローチでキャリアの物語を記述しようとする意欲的な研究である。

キャリアを職位や資格取得といった表面的な経歴ではなく、個人生活ややりがいなどの内面も含む統合的な視点で捉えたとしたことにより、語られ再構成された物語は一人ひとりユニークで奥行きのあるものとなっている。また、複数回のインタビューにより、個々の参加者のまさにキャリアを重ねているなかでの苦悩やゆきづまりなどがリアルに描出されている。研究参加者と方法により、サクセスストーリーになりがちであった本分野における従来の研究から抜き出した点は高く評価できる。

考察では、研究参加者の語りから描かれたキャリアの物語の意味するところを、先行研究や概念を用いて検討している。ScheinやDonnerとの一致をみない点について検討を加えた点、特に参加者の自信のなさや揺らぎの大きさについて組織や部署における上司や同僚、医師との関係、さらにはそれらを包む文化の影響などに関連付けて検討したこと、専門職としての判断が形成される中期看護師にとっては「中心化」よりは脱「中心化」が決しておかしくはないことなどの議論は注目に値する。

看護協会の定義から出発した「ジェネラリスト」ではあったが、参加者の語りから、参加者にとってジェネラリストとして在ることの意味を一定明らかにし得たことも評価できる。

以上から、都市部の急性期病院を場とするキャリア中期のジェネラリストのキャリアを当事者の立場を大切に、物語として記述するという研究目的は概ね達成されており、本専門委員会では、審査の結果、本論文を学位規程第3条により、博士（看護学）の学位論文の水準に達していると認め、「合格」と判定した。